

消えて行った小鳥たち

森本眞智子

早春の淡い空に 雲だけが浮かんでいる
空が寒い 静かすぎる 鳥の声さえも少なくなった
私が子供だった頃
空には風が舞い

子供たちの声が、いつだって響いていた
私も男の子たちにまじって風を上げた
父が 竹を細く切り裂いて作っておいてくれる竹ひごを使い
ありあわせの紙に絵を描いて貼り付け 風揚げをしていた

今 空に風は上がらない 子供たちの声もしない
子供たちは どこで何をしているのだろう
子供たちの声だけではない 鳥の声も少なくなった
あんなに 飛んでいたスズメたちが来なくなった
庭の裸木から まるで枯葉が舞い散るように
ばらばら地上に降り立ったり ふいに舞い上がったりにして 私を驚かせていたのに

馴染みの 冬鳥たちはどこにいるのだろう
ヒューヒューと鳴いていたひよどりの声もしない
庭の赤い実を食べに来ては ツイツイと鳴いていたメジロも来ない
ジョウビタキの姿など 何年も見ていない 神経質で臆病な鳥だったが
いつも正装して 紋付 などと呼ばれていた 私の好きな鳥だった

モズの声もしない 小柄だが狂暴
弱い鳥を襲い 小枝に引っかけて置く モズの早贄は有名だ
そういえば 背黒セキレイの姿も消えた
大通りから人家の多い脇道に入ると
まるで走ってくる車をからかうように 道の真ん中で
なにやらつらばみながら のんびり歩いていた 人懐こい感じの渡り鳥だった

温暖化のせいだろうか
この星に何か異変が起きているのだろうか
それとも彼らは ただどこかへ 移動してしまったのだろうか
南天や 千両が 赤い実を付けたまま つらばむもの達のこなくなった庭で
いつまでも 所在無げに立ち尽くしている